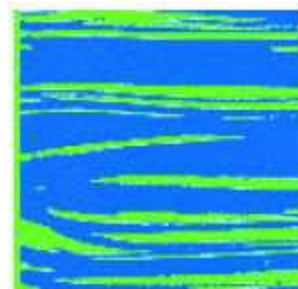


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2015年 秋号 No. 80 (2015年12月25日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第34回年次大会のご挨拶……………佐伯 大輔
行動分析学の歴史インタビュー(4)……………伊藤 正人
第4回サラソタ会議に参加して……………杉山 尚子
自著を語る：『部下を育てる！強いチームを作る！リーダーのための行動分析学入門』……………島宗 理
連載：いま、こんな職場で働いています「仕事に活かす行動分析学」……………今関 仁智
編集後記……………ニューズレター編集部

日本行動分析学会第34回年次大会のご挨拶

佐伯大輔
(大阪市立大学)

このたび、第34回年次大会を大阪市立大学が担当させて頂くことになりましたので、ご挨拶させて頂きます。会期は2016年9月9日(金)～9月11日(日)の3日間(9日については、自由集会を予定しています)、会場は大阪市立大学杉本キャンパスです。大阪で年次大会を開催するのは今回が初めてということで、身の引き締まる思いで準備を致しております。

9月初旬の大阪は、まだ残暑が厳しい時期かもしれませんが、大阪の街は交通の便がよく、観光スポットも多数ございますので、大会前後にお楽しみ頂けるのではないかと思います。大阪市立大学は、本学会の会員が数名前後と小さな所帯ですので、コンパクトな大会になるかと思いますが、スタッフ一同、皆様のご来場を心よりお待ちしております。

<行動分析学の歴史インタビュー(4)>

インスツルメンテーションの歴史と JEAB の審査プロセス

伊藤正人

(大阪市立大学・名誉教授)

国内外の行動分析学の歴史に関する資料の収集と保存のプロジェクトの第4弾として、実験的行動分析学に長年携わってこられた、伊藤正人先生(大阪市立大学・名誉教授)に、お話を伺いました。

佐伯大輔(以下、佐伯):伊藤先生には、長年、行動分析学に携わってこられたということで、色々お聞きしたいことがあるのですが、その中でも、今回は、インスツルメンテーションと、Journal of the Experimental Analysis of Behavior(以下 JEAB)の Board of Editors のご経験があるということで、JEAB に投稿された論文の審査プロセスにつきまして、お話し頂ければと思います。よろしくお願い致します。

①インスツルメンテーションについて

佐 伯:先生が学生になられる前の時期の話になりますが、スキナーから日本の大学に実験箱が贈られた時のことをご存じのことをお話してください。

伊藤先生:僕が慶應の大学院修士課程に入ったのが1971年でした。その時に、後に浅野俊夫先生とラッタル(Lattal, K. A.)さんとの共著論文(Asano & Lattal, 2012)¹の中で「慶應レコーダー」と呼ばれる累積記録器とピクニックアイスボックスを改造した実験箱があったのです。これらの写真は、僕の「行動と学習の心理学」(伊藤, 2005)²に記載してありますが、それは、スキナーが好意で贈ったのではなく、米国

クラーク大学出身の横山松三郎という慶應の教授だった人が、公費(国の資金)で買って、ハト用実験箱を慶應へ、ネズミ用実験箱を東大に送ったのではないか、ということを知ったことがあります。日本におけるオペラント条件づけ研究の歴史という観点から、この経緯を明らかにする必要がありますね。

僕が大学院に入った時には、浅野先生(当時、京都大学霊長類研究所心理部門助手)がそれを京都大学霊長類研究所(以下、霊長研)に持って行って使っていました。それを見本に、「東測」というメーカー(実際は、下請けの久保測工機が製作)に作らせて、それができたので、「慶應レコーダー」は、慶應に戻ってきていて、研究室の片隅に置いてありました。当時、僕が動かした時は、動いているのかどうかがわからないくらいの遅いスピードでした。どういう仕組みになっているのかを知るために、中をいじってみたりしたところ、動かなくなってしまったのです!

佐 伯:はあ……。

伊藤先生:こちらも累積記録器のメカニズムに詳しいわけではなかったので、そのままにしておいたけれど、それ以来そのままの状態……。

佐伯:それは先生、壊したということでは?

伊藤先生:そう、壊したということですね(苦笑)。浅野先生が「慶應レコーダー」の来歴について JEAB に論文を書いた後、実際に動くようにして累積記録を描かせたわけです。つまり、浅野先生が僕の壊した「慶應レコーダー」を四十数年ぶりに修理したことになりますね。

佐伯：それは、1つだけぼつんとあったんですか？誰かが似たようなものを作るということはなかったんですか？

伊藤先生：慶應は、その当時、オペラント条件づけの研究をしている割には、意外にも実験の自動化については極めて遅れていて、ほとんど手動で行っていました。また、研究が、いわゆる「オペラント弁別」に関するテーマなので、正刺激(S+)と負刺激(S-)を継時提示して、S+の時に、変動間隔(VI)スケジュールで強化子を呈示するという手続きが用いられていました。VIスケジュールといっても、今我々が知っているようなものではなくて、ストップウォッチを動かして、例えばVI 1分スケジュールの場合だと、1分間に1回、どこかで強化可能にする時間を決めておいて、ハトがその時にキーをついたらフィーダー(餌皿)を上げるという方法で、ほとんど手動で行っていました。強化スケジュールの理解も不十分でした。

動物実験室は、通称「ハト小屋」と呼ばれていた木造平屋建ての建物で、中央部分に個別ケージを置く棚が在り、その周りを囲むように4室から5室の実験室が配置されていました。その一角には、集団ケージもありました。体重統制をしていない時は、ここでハトを飼育していました。ハトもナイーブ(実験経験のない)なものは、あまりいなかったもので、改めて反応形成する必要もありませんでした。ある程度の期間、実験を経験させたら、千住大橋付近にあった小鳥屋に引き取ってもらって、新しいのを持って来るのですが、前に返したハトがまた来ていたりして(笑)。「前にいたのがまたいるね」というのがよくありました。使っていたハトはレース鳩だったので、生まれたときに登録された足環をはめるので、生年や個体識別ができたのです。

当時ハトで実験をしていたのは、故小川隆教授を始め、故佐藤方哉講師、河嶋孝助手の指導を受けていた学生達でした。河嶋先生が日大農獣医学部に移った後、渡辺茂先生が助手になる

という時代でした。

当時の実験は、実験室内に置かれた実験箱の横について、暗闇の中で操作をすべて手動で行っていました。これは、僕もよくないと感じていましたけど。そのうちに、研究棟(三田キャンパス)の地下に実験室ができて、そこに電磁シールドの脳波室があった。そこで生理学的指標を取る実験をする時に、脳波室の中に実験箱を置いて、その外で我々がモニターを見ながら実験をするということになったんです。その時に初めて、自動化しなくてはいけなくなり、そのための工夫をしたのです。

佐伯：必要に迫られて作るようになったわけですね。

伊藤先生：僕は、情動の問題に興味があったので、「回避行動の研究」という、当時の慶應の本流ではないテーマをすることになりました。小川先生にも「興味あるならやったらいいですよ」と言われ、テーマについてはかなり寛容だったと思いますが、そんなことをやっている人は、誰もいないので、全部、一から作らないといけなかったのです。学会発表の折には、京大の故本吉良治先生や関学の今田寛先生、滋賀大の関口茂久先生と同じセッションになり、先生方から「慶應では珍しいね」と言われたのを覚えています。

佐伯：その場合の嫌悪刺激は電気ショックですか？

伊藤先生：そう。ハトに電気ショックを与えるにはどうしたらいいか、当時いくつか論文がありました。例えば、ハトの足裏は角質なので、グリッドから電気ショックを与える方式だと安定的な効果が得られない。ばらつきが大きい。だから、皮膚の中に電極を埋めると確実に効果が得られるとか。また、すぐに「慣れ(馴化)」が起こるので、徐々に電圧が上がっていくようにすれば良いという論文があったのでそれを参考にしました。例えば、10秒間の間に電圧が自動的に上がっていくように、スライダック(可変電圧器)をモーターで動かす装置を考えまし

た。手動では一定のスピードで上げるのは難しいので。これは、小さな町工場にお願いして作ってもらいました。その時に、予算がこれだけなのでという、最初は難色を示していましたが、最後には「慶應のためだからやりましょう」といって引き受けてくれたことがとても印象深かったことを覚えています。

実験をすべて自動化しようと思ったら、それ以外の実験装置も何とかしないと行けません。浅野先生が霊長研で行っているから「教えてもらったらどうか」と佐藤先生に言われて、IC工作（論理素子を用いた実験制御装置の製作）を教わることになりました。これは、修士論文の実験を行う前だったので、はっきりとは覚えていないのですが、1971年の秋から翌年の春頃だったと思います。

そして、それをもとに、実験装置を製作しました。回避行動の分析のために、反応間時間（IRT）を計測し、かつ度数分布を描くことを考えていましたので、各反応間時間を、自動的に分類して分布が描けるような反応間時間の分配器を製作しました。当時はタイムカウンターを使って、各反応時間間隔をプリントアウトしていましたが、そうすると後で集計しなくてはならないことになります。それは大変だから、11個の反応間時間の階級を設定して、各階級の幅を自由に設定できるようにしました。これで、分布を描くための労力をかなり削減できました。実験が終わると、もう度数分布ができています（笑）。

佐 伯：制御の方はどうされたんですか？

伊藤先生：制御装置も作ろうと思ったのですが、河嶋先生が日大に移るにあたって、いろいろな装置を買い、その中に、実験を制御するためのロジックモジュールもありました。それを修論の実験のために借りてきて使いました。このプログラミング装置は、各論理素子を結線して、論理演算を実行させるもので、それで実験手続きを自動制御することができました。このロジックモジュールと反応間時間の分配器、東測製

の累積記録器、それにハト用実験箱（木製）で実験を自動化する実験システムを構築しました。ハトの回避行動として、ペダル踏み反応と、ピンポン玉を半分にしたようなふくらみをつけたキーに対する反応を測定し、回避行動の形成と維持を比較する実験を考えたのです。これを初めての英語論文（Ito, 1975）³としてまとめました。

佐 伯：最初の論文は回避行動の研究だったのですね。その実験システムは全部自作で？

伊藤先生：全部自作。何も無いから。「オペラント弁別」というテーマだったら、すでに装置があるからそれを使うことにはなりますが、全く誰もやってないことをやるとなったから、一から自分で全部整えないといけないんです。

佐 伯：そのあたりは、コンピュータが出てくる前の話になるんですね。

伊藤先生：そうですね。大学院の博士課程に入った時に、慶應の医学部生理学教室と共同研究をすることになりました。生理学教室の故塚田裕三教授が、行動の基礎にある神経化学的過程に興味があるということで、サルで実験をやりたいというので、「霊長研でサルの扱い方・実験の仕方を勉強してくるようにならなりました。そこで、共同利用研究員として、博士課程2年生の時（1974年）に犬山に行くことになりました。実験の合間に改めて浅野先生からIC工作の「講義」を受けましたが、その時、藤健一さん（当時、中京大学助手）も来ていました。藤さんと一緒に受講した「講義」というのがまた想像を絶するもので、いつも夕方に始まり、それがしばしば明け方まで延々と続く苦行のようなものだったのです（苦笑）。

犬山から帰ってきてから、生理学教室で使用するサル用実験箱を自宅近くの小さな鉄工所に図面を渡して作ってもらいました。このような経緯の中で、塚田先生から、名古屋の某医科大学に行動実験のための実験室を作りたいので、具体案を考えてほしいという依頼があり、サルとネズミを対象とした実験をミニコンで集中制

御するための実験施設案を提案しました。この経験は、後の大阪市大の実験棟新築の際に、大いに役立ったのです。

佐 伯：そういうご経験があったのですね。サル用の実験箱は、特注だったら高かったのではないですか？

伊藤先生：どうだったか覚えていません。請求書を医学部にまわすだけですから(笑)。そういうことで、1974年から1975年にかけて、霊長研でニホンザルを使った実験を行っていました。丁度この時、カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)のファンティノ(Fantino, E.)教授*が京都大学招聘教授として犬山に来ました。霊長研心理部門の室伏靖子先生から世話係を仰せつかり、ファンティノ教授のお世話をしました。その折り、ファンティノ教授の様子を見に来た故レイノルズ(Reynolds, G. S.)教授とも初めて会い、いろいろな話を聞いたのは良い思い出です。この縁で、1982年から1983年にかけて、文部省公立大学在外研究員としてUCSDで研究することになったのです。UCSD滞在中は、レイノルズさんの研究室を使っていました。当時レイノルズさんは学部長でしたので、彼の研究室が空いていたため、貸してくれたのですが、彼の机の上には数冊の本が置いてあり、そのうちの一つは、中根千枝の「タテ社会の人間関係」であり、もう一つはマルキ・ド・サドの「ジュスティーヌ」だったことを覚えています。

佐 伯：そういう出会いが大切なんですね。その当時の犬山での実験制御はロジックモジュールだったんですか？

伊藤先生：その頃、霊長研では、ロジックモジュールも使っていましたが、丁度、米国DEC社のPDP8というミニコンを導入したところだったのです。このため、ミニコンの実験制御用システムのプログラミングと外部の実験装置につながるインターフェイスを作る必要がありました。浅野先生がミニコンを動かすためのアセンブラという機械語に近いプログラミング言語を用いて、システム全体のプログラミングをして

いました。それがある程度できたので、ニホンザルの時間弁別の尺度化の実験を始めたのです。これも英語論文(Ito & Asano, 1977)⁴としてまとめることができました。

あの当時のICは、確かに市販はされていましたが、解説本がたった1冊しかありませんでした。浅野先生からの説明を筆記したノート、テキスト1冊、それから、米国の半導体メーカー、テキサスインスツルメンツ社から出ていた、各論理素子のピンの回路図を解説したハンドブックの3つを頼りに作ったのです。当時、東京・秋葉原の電気屋街に部品を買いに行っても、AND回路とかOR回路のような基本的な論理素子は、手に入りましたが、特殊なもの、例えば、75154という入力変換に必要なICは売っていませんでした。だから、直接、テキサスインスツルメンツ社の青山の事務所に電話して、4個とか5個とか買ってくるんです。学生が行っても応接室に通してくれて、お茶が出されて、という時代でした。

佐 伯：それを使ってICの工作を、基板を作っていくことをされていたんですね。水晶発振器もその時にあったのですか？

伊藤先生：水晶発振器はもう少し後ですね。当時は水晶発振器ではなくて、商用電源(AC)の50サイクルの波形を取り込んで、矩形波に成形してパルスを作るということをやっていました。それからしばらくしてから水晶発振器の良いのが出てきて、それを基板上に乗せるようになったのです。

佐 伯：当時、雑誌「トランジスタ技術(略して「トラ技」)はあったんですか？

伊藤先生：ええ。実際に作らなければならなくなった時に、「トラ技」を購読し始めました。それ以降購読していましたが、定年退職の前に購読を止めることにしたときは、感慨無量でした。でもほとんどの記事は、知りたいことと関係がないわけです。その中から、自分が作ろうとしている実験制御装置は、時系列制御なので、それに関連するような記事を探し出してきて利用

していました。

佐 伯:なるほど。ミニコンの PDP8 がその後、今あるようなパソコンに発展していくわけですよ。

伊藤先生:そうですね。ただ厳密には、ミニコンとパソコンとは設計思想が異なるので、ミニコンが発展してパソコンになったという訳ではないのです。パソコンのルーツは、プログラム内蔵電卓です。

ミニコンがある程度小さくなって、実験室に置けるようになったことが、実験制御のための装置としての可能性を拓いたのです。でも相当高価だったので、心理学関係の大学・研究機関で持っていたのは霊長研と実験動物中央研究所だけだったと思います。70 年代の前半の時期のことですが。その時期の実験動物中央研究所には、柳田さんという行動薬理学の人が米国で習得したものを導入していましたので、日本で最先端のサルの実験システムができていました。見学にも行きましたが、ミニコンで実験が全部自動化されていて、それは羨ましいと思いました。また、サルの飼育施設も最先端のもので、霊長研の飼育施設が見劣りするぐらいの施設でした。

ミニコンは高価なので、そんなにすぐに普及したわけではありません。慶應にもありませんでした。そうこうしているうちに、80 年代初めにパソコンが出てきました。僕は、1976 年 4 月に大阪市大に助手として着任しましたが、その時は、自分で回路設計し、IC を使って、実験のための基板を組んでいました。程なくして、米国 MITs 社製のパソコン (Altair8800-b) による実験システムを購入して使い始めました。このパソコンは、心理学教室の予算では足りないで、哲学教室からも融通してもらって、やっと購入することができたほど高価なものでした。

これは、本体とテレタイプという、キーボードとプリンタ、それにテープリダーが一体となった端末装置から構成され、Basic というプ

ログラミング言語が使えるものでした (ディスプレイはありませんでした)。この時のパソコン本体の前面は、まさにミニコンの前面パネルの構成を踏襲したもので、8 ビットの CPU のため、8 個のスイッチとそれに対応するランプが並んだものでした (ミニコンは、12 ビット CPU なので、12 個のスイッチとランプでした)。スイッチのオン・オフで 1 と 0 の命令を 1 行ごとに入れることができ、また、命令の実行をランプの点灯・消灯から 1 行ずつ読み取ることもできたのです。今から見れば、そうした機能と構造 (前面のデザイン) は不用だったのですが。このことは、人は先の経験 (ミニコン) から逃れられないこと (先例を引き継いで次の新たなものが生み出されること) を如実に示す例ではないかと思えます。

実験制御のプログラムは、紙テープに穿孔したものをテープリダーから読み込んでいました。このため、プログラムの起動まで 5 分以上の時間が掛かっていました。しばらくすると記憶媒体として 8 インチのディスクが使えるようになり、起動までの時間は、飛躍的に短くなったのですが、その一方、これが極めて脆弱なため、故障することもよく起きました。故障すると、米国製なので、部品の取り寄せ等で 1 ヶ月位は実験が中断するというトラブルに泣かされました。現在のパソコンの信頼性の高さと比べると、それは比べようもないほど低いものだったのです。

80 年代初めに NEC からパソコンとして、キーボードと基板が何枚かあるキットのようなものが出た時に、「これは実験制御に使えるな」と思いました。でも僕は、自分で回路設計した実験システムや米国製のパソコンによる実験システムができていたので、実際には使いませんでした。

佐 伯:では、パソコンが本格的に普及した後に、今あるような感じになったのですか？

伊藤先生:そうですね。NEC が CRT ディスプレイとキーボードと本体とを 3 点セットで売り出

してからは、それを買って、後は、君たちに教えたように、インターフェイス部分を作り、マイクロソフトの N88-Basic でプログラミングすれば、実験の自動制御はできるようになりました。これを機に米国製のパソコンは退役させました。これ以降は、「IC の知識が無いと実験を自動化することができない」ということが無くなりました。部分的な知識で、インターフェイスさえ作ればできるという時代になっていったのです。

佐伯：そのおかげといいますか、そのせいといいますか、(私は) IC については勉強することなく来てしまいました(苦笑)。ここまでのお話で、実験の自動化に関するインスツルメンテーションの流れについては理解できました。

少し話は変わりますが、以前先生から、ラット用に引き込み式レバーを作る時に、ロータリーソレノイドを利用して回転運動を水平運動に変換するという話をお聞きしたことがありましたが、ああいうアイデアはどういう時にひらめいたのですか？

伊藤先生：さっき言ったように、脳波室でハトの弁別学習の実験をすることになった時に、自動化する必要に迫られたのです。最初は、誰かが脳波室に入って、S+と S- を手で動かしていましたけど、室外から刺激呈示の指示を出す人と、室内で刺激を出す人のタイミングが合わなくて、これは根本的に考え直す必要があるということで、自動化することにしたのです。

手動の時は手で刺激を横に動かしていましたが、この運動を実現するために、ロータリーソレノイドを利用する方法を思いつきました。回転運動を水平運動に変換するには、回転するロータリーソレノイドの軸に固定した長方形のアルミ板の中央部分を楕円形に大きくくりぬき、そこに正刺激と負刺激を乗せた台に取り付けた軸を通してあげれば良いのです。そのくりぬいた楕円の遊びの部分に水平運動に変換する仕組みになっています。このアイデアの源は、高校の物理で習った運動する物体の軌跡の知識にあっ

たと思います。大阪市大で引き込み式レバーを作った時はこの方法を応用したのです。

佐伯：あともう1つ、ひらめきということでおうかがいしたいことは、大阪市大でハトの実験装置を作成された時に、市販の魚を焼くための網を実験箱の床に利用されましたが、そういうひらめきはどのような時に起こったんですか？

伊藤先生：つまりね、既製品を使うということは、「安上がりにはできる」、ということなんです。お金があれば、業者に作ってくれと言えば作ってくれますけど、それは高価です。それで、既製品で使えるものは無いかって、いつも考えていました。デパートに買い物に行ったついでに、家庭用品などを売っている場所を「実験に使えるものはないか」と思いながら見てまわっていました。

東急ハンズで、アルミのフレームで、ビスを使わない、はめ込み式の部材を見つけた時も、基本単位が 30 cm のサイズだったので、ハト用の実験箱にぴったりだと思いました。それで、実験箱の大きさが決まると、それに合うような大きさの床となる網がないかと思って探しましたが、大阪難波の道具屋筋にもありません。でも、偶然、阪急デパートでぴったりのサイズのステンレス製の焼き網を見つけたんです。これは使えると思いましたね。

佐伯：今後、行動分析学を発展させるために、インスツルメンテーションに関して、どのような教育や研究が必要とお考えですか？

伊藤先生：時代によって必要とされるものは変わるわけなので、それに合わせて考えないといけないと思います。僕らが学生・大学院生の頃は、心理学で実験するには、写真の技術を学ぶ必要がありました。刺激を呈示する時に、写真を撮って、スライドを作ってそれを刺激としてスライド・プロジェクターを使って提示していましたから。だから、写真を撮影・現像する技術を習得する必要があったのです。

佐伯：そういうことを学ぶための授業はあったのですか？

伊藤先生：当時、慶應の心理学では、大学院修士課程の授業で、「心理学実験装置研究」という科目がありましたけど、そこでは、タイマーの校正や刺激の輝度の測定法など実験心理学に必要とされる基本的な技能を習得することを目的としていました。この科目は、その後、廃止されたようですが、本当はそういう科目がカリキュラムにあったほうがいいですね。特に、今は、パソコンで実験制御するにはプログラミングの知識が必要なので。心理学の研究に特化したプログラミングとインターフェイス製作に関する授業はあった方がいいと思います。

プログラミング言語を Visual Basic に替えたときに、タイマーの校正という経験があったので、組み込まれているタイマーの精度を確認するということのできたのだと思います。その結果は、組み込まれていたタイマーの精度が実にいい加減であることが判明しましたが、その対策も考えることができましたね（佐伯・内田・伊藤，1997）⁵。

佐伯：金工・木工についてはどうでしょうか？

伊藤先生：パソコンだけで全部できてしまうのであれば、必要ないと思いますが、実験室の中で何かを組む必要があるのであれば、いわゆる「工作」の知識を持つ必要はあると思います。

佐伯：必要に応じて勉強するということですね。授業として行うまではしなくても良いと。

伊藤先生：君にもこれまでに何度か言ったけれど、「必要は発明の母」とは本当によく言ったもので、必要に迫られないと人はやらないわけです。その必要性に迫られて、「これやらなかったら修論の実験ができない」となったら、死にもぐるいでやるわけです。僕も電気工作についての経験はあまりなく、ICの何たるかもよくわかっていませんでしたが、必要性があったからやむを得ず勉強をしたのです。

その当時、ICのことは、電気工学科の学生さんでもほとんど知らなかったと思います。昔、慶應の心理学教室には、電気工学科の2部（夜学）の学生さんで、昼間は心理学教室の技官の

ような仕事をしていた人がいましたが、1971年頃の時期は、その人にICのことを聞いても、ちんぷんかんぷんでした。なので、こっちが教わってきたことを、逆にその人に教えていました。そういう状況だったのです。

佐伯：ありがとうございました。インスツルメンテーションについては、「必要は発明の母」というキーワードが出たところで終わらせて頂きたいと思います。

②JEABへの投稿と審査のプロセスについて

佐伯：次に、JEABへの投稿と Editorial Board に関することをお聞きしたいと思います。先生が初めて JEAB に投稿された頃の日本の実験的行動分析学における海外発信の様子というのはどんな感じだったのでしょうか？

伊藤先生：あまり英語論文が投稿されているという感じではありませんでした。JEAB についていえば、たぶん第1号が霊長研の小嶋祥三さんと、僕は2番目だったように思います。

佐伯：心理学全体では、日本人は活躍していた様子でしたでしょうか？

伊藤先生：僕の論文（Ito & Asaki, 1982）⁶が載ったのが1982年でしたが、あの時代に日本人が英語で論文を書いているというのは余りなかったと思います。Ito & Asaki の論文を投稿した時に驚いたのは、レフェリーの1人から、「この論文は mathematical exercise をしているだけだ」というネガティブなコメントが返ってきたことです。JEAB では、数理的アプローチがそれなりに認知され、確立しているものだと思っていましたから、そういうコメントが返ってきたのは、ショックでした。80年代初め頃は、米国でも必ずしも数理的アプローチが認知されていなかったのです。

佐伯：他の雑誌と比べて、JEAB の特徴はありますか？

伊藤先生：やはり個体のデータをきちんと出さないといけないということです。Ito & Asaki

(1982)の論文でも、最初に個体データを出し、そして次にグループにまとめたデータも出しています。そのグループデータを示した図でも、個体データが平均値の周りにどう分布しているかがわかるように図を描きました。そのあたりがJEABの一番のポリシーだと思います。

佐伯：先生がJEABに投稿された論文で、掲載された場合とされなかった場合の違いは何でしょうか？

伊藤先生：載らなかったのは、データがクリアでない場合です。その時は、個体間のデータの整合性にやや問題があることと、そこから論文に書いたような主張ができるのか、というコメントが返ってきました。もっともな指摘ではありました。しかし、基本的にJEABという雑誌は、教育的だと思います。ネガティブなコメントもありますが、「ここはこういうふう書き直した方が良い」というようなサポートティブなコメントが多いと思います。

佐伯：Editorial boardとしてのご経験についてですが、JEABの編集プロセスについて、特徴的なことはありますか？

伊藤先生：1990年からの3年間担当しましたが、その間21本くらい審査しました。その時は、ファンティノさんが編集委員長で、彼から依頼を受けて編集委員の1人として担当しました。その時の印象は、ファンティノさんは、わりとサポートティブな返事をすると感じました。ある投稿論文について、僕とファンティノさんのお弟子さんに査読が回ってきました。その結果は、2人とも「このままでは掲載できない」という結論でした。このような場合、普通だったら編集委員長は「掲載不可」と判断するのですが、ファンティノさんは、「これは実験の中身は良いので載せたい」と。それで、こちらも「どうしたら載せられるようになるか」という観点でコメントする」というようなことがありました。

佐伯：かなり手厚いですね。

伊藤先生：その論文の内容が、ファンティノさんの研究テーマに関係しているということもあ

ったかもしれません。

佐伯：大きな判断ですね。日本の雑誌ではあまり聞いたことがないですね。他に、日本とは異なるようなご経験はありましたでしょうか？

伊藤先生：21本くらい審査しましたが、結果的に掲載された論文は少なかったのです。僕のところレベルの高くない論文がまわってきたのかなという気がしましたが、採択率は、2割はなかったと思います（苦笑）。でも、もう1人のレフェリーと判断が異なったことは、1例だけで、ほとんど一致していました。その1例は、僕が掲載可で、もう1人が掲載不可でした。だから、そんなに僕が厳しかったわけではないと思います。

佐伯：アメリカの研究者は、ちょっとしたデータでもすぐに論文に書いて投稿する、ということでしょうか。

伊藤先生：そういうことだと思います。ただ、シドマン(Sidman, M.)さんが来日して、京大で講演をした後、会食をした折り、自分がJEABのレフェリーをした時の採択率が2割もなかったという話をしたら、「それはちょっと厳しいな」という感想をもらっていました。

佐伯：論文を審査する期間はどのくらいだったんですか？

伊藤先生：審査期間は3週間。きちんと3週間以内にコメントつけて返すことをしていました。コメントを英語で書いて3週間以内に返すのはかなり大変でしたね。返送して「ああ、やれやれ」と思って1週間くらいしたら、また次の論文が来る、という感じでした。ほとんどの論文は、ネイティブの人が書いたもので、それにネイティブでない僕がコメントをつけるわけですから、かなり神経を使いました。コメント文を何度も推敲するために、相当な時間と労力を使いました。その中で、同じ人が何度も投稿してきたことがありました。

佐伯：それは別の論文ではなく、ということですか？

伊藤先生：以前リジェクトされたのを再投稿と

いうことで出してきたようです。でもやはりダメでした。だって何にも新しくなっていないのですから。恐らく、投稿した本人は、別のレフェリーのところへまわったら、ポジティブな結果になると思ったのではないですか。

佐伯：なるほど。

伊藤先生：でも結局、前と同じレフェリーにまわってきて、同じ結果になる。それで、その人は3回目には違う雑誌に投稿したんです。そうしたら、その雑誌から僕のところへ査読依頼が来ました（笑）。

佐伯：内容は変わってなかったんですか？

伊藤先生：ええ。内容はあまり変わっていませんでした。なので、査読結果は以前と同じでした。

佐伯：そこまで出版への執着が強いということですかね。その人だけかどうかはわかりませんが……。他に、JEABの投稿や編集プロセスについて、特徴的なことはないでしょうか？

伊藤先生：編集長（Editor）がいて、その下に2名のレフェリーがいました、あるいは、副編集長（Associate editor）の下に2名のレフェリーがいました。つまり、常にレフェリー2人＋責任者1人という体制でした。ただし、2人のレフェリーの意見が分かれた場合には、第3のレフェリーが加わることもありました。権限は責任者にありましたので、僕ら（レフェリー）が、コメントをつけて返したら、後は、責任者の判断で掲載するかどうかが決まっていました。日本の学会誌（「行動分析学研究」や「心理学研究」）では、同じ査読者が何度も読むようになっていますが、それは改めた方が良いでしょう。そこまでレフェリーに責任を持たせなくても良い。権限を持った人が判断したらいいのです。

1人のレフェリーがうんと言わなければ掲載されないというのは良くないと思います。

佐伯：なるほど、よくわかりました。今日は長い時間ありがとうございました。

¹ Asano, T., & Lattal, K. A. (2012). A missing link in the evolution of the cumulative recorder. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, **98**, 227-241.

² 伊藤正人（2005）「行動と学習の心理学：日常生活を理解する」 昭和堂

³ Ito, M. (1975). A comparison of two different operanda for shaping and maintaining avoidance behavior in the pigeon. *Japanese Psychological Research*, **17**, 25-32.

⁴ Ito, M., & Asano, T. (1977). Temporal discrimination in Japanese monkeys. *Japanese Psychological Research*, **19**, 39-47.

⁵ 佐伯大輔・内田善久・伊藤正人（1998）Visual Basic と PC カードを用いた行動実験制御システム 行動分析学研究, **13**, 66-72.

⁶ Ito, M., & Asaki, K. (1982). Choice behavior of rats in a concurrent-chains schedules: Amount and delay of reinforcement. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, **37**, 383-392.

インタビュー日：2014年11月28日

インタビュー場所：立命館大学朱雀キャンパス

インタビューアー：佐伯大輔（2014年度広報委員）

*ファンティノさんは、今年（2015年）9月22日に逝去されました。ご冥福をお祈り致します。

第4回サラソタ会議に参加して

杉山 尚子
(星槎大学大学院)

京都で開催された国際会議の準備が佳境に入ってきた2015年7月末、ノースフロリダ大学の Iver Iversen 教授から1通のメールが届いた。フロリダ州のサラソタで20名ほどで行うクローズド・ミーティング (the 4th Sarasota symposium on behavior analysis) への招聘状であった。日程は国際会議の1ヶ月後の10月末。十分な準備ができるかどうか懸念もあったが、Iver のメールは、言外に、「今回を逃すともうシドマン先生には会えないかもしれませんよ」と言っているようでもあり、スケジュールを調整し参加を決めた。

サラソタ会議とは何か

サラソタとは、フロリダ州の南にある避寒地で (オードリー・ヘプバーンも住んでいたそうである)、Murray Sidman 先生がボストンを後にして終の住処に定められた地である。そして、サラソタ会議とは、Iver Iversen と Per Holth (オスロ大学) が主催者となり、シドマン先生を囲んで、2011年から開催されているクローズドのシンポジウムである。高齢となり、移動が難しく、ABAI 年次大会に参加できなくなったシドマン先生のために、Iver と Per が、サラソタに20~25名の研究者を呼び、シンポジウムを開くことを思いついたのだ。

今回の参加者は、William Ahearn (NECC), Erik Arntzen (オスロ大学), Paula Brag-Kenyon (マサチューセッツ大学), John Donahoe (マサチューセッツ大学), Per Holth (オスロ大学), Iver Iversen (ノースフロリダ大学), Andy Lattal (ウェスト・バージニア大学), Darnell Lattal (ADI), Joe Layng (Head

sprout), William McIlvane (マサチューセッツ大学), David Palmer (スミスカレッジ), Martha Pelaez (フロリダ国際大学), Carol Pilgrim (ノースキャロライナ大学), Jesus Rosales-Ruiz (ノーステキサス大学), Kate Saunders (カンザス大学), Charles Sidman (シドマン先生のご長男), Greg Stikeleather (元? Head sprout), Gerson Tomonari (サンパウロ大学), そして私の19名。一見してわかることは、シドマン先生の弟子筋がメンバーに多いことは当然として、私の参加をはじめ国際色が強いことである。実際に米国外からの参加は、Tomonari 博士 (ブラジル)、Per Holth と Erik Arntzen (ノルウェー)、私の4名だけであるが、出身国は私が知る限りでもデンマーク、キューバ、ブラジル、メキシコ、スロヴァキアと多岐にわたり、シドマン先生がいかに行動分析学の国際化に貢献されてきたかが伺える。それは、フレッド・ケラー先生の後継者としてブラジルにおける行動分析学の発展に寄与されただけでなく、米国外の学生や若手研究者に対して献身的な支援をされてきたからであろう。私の後輩にあたるフィリピンからの留学生(当時)は、NIHでポスドクを行うにあたり、短期間日本に滞在されたシドマン先生に推薦状をお願いしたところ、快く書いて下さったこともあった。

シドマン先生宅訪問

日本を発つ前に、主催者の Iver は懇切なメールで何くれと心配りをしてくれたが、その中の一つに、「参加者は皆シドマン先生と話をしたがるから、もしゆっくり先生と話をしたいなら、会議が始まる前に先生のお家に一緒に行き

ませんか？」というお誘いがあった。「お願いします」と即答し、初日のレセプションに先立つ早い午後に先生のお住まいに連れて行っていただいた。Iverからは、日本を発つ前に「Prepare yourself that Murray Sidman is 93 and looks older than the last time you saw him.」という覚悟を促すメッセージも頂いており、緊張しながらの訪問であった。シドマン先生のお住まいは高齢者専用の集合住宅で、まるでホテルのように充実した共用施設と内観を備えていた。お部屋は最上階の3階にあり、陽光の差し込むリビングルームの広い窓からは池や樹木など豊かな自然が見渡せるとても快適な居宅で、壁面にはさまざまな絵（来日された時に高島屋で購入した浮世絵もある）が飾られていた。

その中で、シドマン先生は窓を背にした革張りのソファに腰掛けておられたが、私たちが入っていくと、歩行補助具を頼りにゆっくりと立ち上がり、歓迎して下さった。目はほとんど見えず、耳も遠いと聞いていたが、両耳に補聴器をつけられ、会話は驚くほど明瞭、その知性はまったく衰えていらっしやらない。ひとしきり歓談した後、3時半になると、Iverが「お昼寝の時間ですね」と会話を打ち切り、私たちはシドマン邸を後にした。

なお、このリビングの奥には書斎があり、そこも見せていただいたが、デスクの上には65インチのディスプレイがあり、これで文字を拡大して書類を読まれるとのこと。書斎は「かつ



写真1 シドマン先生のお宅にて

ての書斎」ではなく、いまでも日々お使いになられていることが一目で見取れた。そして、机上にあった『行動理論への招待』の表紙をめくり、「真礼志度満先生恵存 一九九四年四月十四日」という佐藤方哉先生のサインを見せてくださり、「ナオコ、ページの隅を見せてあげなさい」とおっしゃるので、佐藤先生言うところの「パラパラ漫画」をIverと同行したAndy Lattalに披露した。多くの蔵書の中から、私の訪問のために、この本を準備して下さった心遣いは感謝の念に耐えない。

写真1は、去り際に撮影したもので、右端はシドマン先生のご長男のチャールズである。

サラソタ会議はじまる

会期は2015年10月30日(金)～11月1日(日)の3日間。会場は市内のリゾートホテルHotel Indigoの会議室で行われ、参加者は全員そこに宿泊する。3度の食事と一緒にとる。会議は2日間、午前9時から午後5時半まで。持ち時間は1人30分。ただし、発表時間は10分、20分をディスカッションに当てるルールである。そのために、事前に発表原稿の提出が義務づけられており、それを読んでくることを前提として会議は進められる。テーマは多岐にわたっていた。刺激等価性に関するものが複数あったのはシドマン先生への敬意であろうが、基本的に、数式を使わない、データに基づいた実験的行動分析の王道の研究、概念的研究、そして応用につながる基礎研究という印象であった。

私自身はかねてから考え続けていた弁別刺激と作用刺激の問題(杉山, 2003)をテーマに取り上げ、「On the notation of S^D vs. S^+ 」というタイトルで原稿を準備したが、日本を発つ数日前に送られてきたプログラムを見ると、幸いにもこのテーマは会議の趣旨に極めてかなっているように思われ安堵した。当日、話を終えるとすぐに、John Donahoeが手を挙げたが(感銘を受けたDonahoe and Palmer (1983)の二人の著者に初めて会えたのは嬉しかった)、その質

問は何と、「日本には・〇〇や××のような優れた行動の研究者がいるのに、なぜ彼らはABAIの会員ではないのか？」というものであった。しかもそれを怒ったような真顔で言う。一瞬面食らったが、日本における実験心理学ならびに行動分析学導入の歴史を簡単に説明した上で、「かつては一世を風靡した刺激性制御の研究者たちも、いまでは行動分析学を離れ、比較認知科学の領域で仕事をしていることを考えれば、それは日本だけの問題ではない」と言うのと納得してくれたようだった。この発表の趣旨は、「刺激弁別の実験で実際に用いられる刺激と、個体に作用している刺激（次元）とは分けて考えるべきであり、前者にはS⁺、後者にはS^Dという表記を用いて区別したほうがよい」というものである。私自身の初めてのABAIの年次大会での発表は、Don Baerがチェアをつとめてくださった刺激性制御のシンポジウムであったが（Sugiyama & Sato, 1985）、その実験を進める過程でSidman（1960）の真価に目覚めたことから、このテーマをこの会議でとりあげるのは自分にとっては必然なのだった。

ふたたびシドマン先生

過去3回のサラソタ会議では、シドマン先生ご自身も発表に参加されたそうだが、93歳を迎えられた今回は初めて発表はなさらず、全日程の最後に先生が自由にお使いになれる特別の時間が設けられていた。先生はこの時間を会議全体へのコメントで始められたが、話は熱を帯び、サラソタ会議を通して行動の科学に貢献し、いまなお後進の育成に全力を傾注されているお姿は神々しくさえ思え、それが先生にとって“meaning of life”なのだと声を振り絞るようにおっしゃった時には会場は静まり返っていた。その場に居合わせた幸運に深く感謝している。

一方で、先生の健啖家ぶりがまったく変わっていないのも印象的であった。1994年の春に先生が来日された折に、亡き奥様Ritaとお二人で拙宅に数日間泊まっていたことがある。

我が家では外国からの宿泊客には初日の夕食にはトンカツ、ご飯、お味噌汁をお出しし（和洋折衷）、その召し上がり具合で、和食にシフトしていくか、心ならずも洋食にシフトしていくか判断していた。しかし、当時すでに70歳を超えていた先生ご夫妻にトンカツでは胃腸の負担が大きかろうと思い、しゃぶしゃぶを提供することを思いついた。牛肉を念のため1kg調達し（母が差し入れてくれた）、様子を見ながら鍋に投入していたが、ペースが落ちかけてきたのもうよかろうと肉をしまおうとすると、「ナオコ、その肉は明日食べるのか？」とお聞きになる。一瞬、質問の意図がわからなかったが、はたと思い当たり、「もう少し召し上がりますか？」と尋ねると、Yesのお返事。用意した肉をほぼ完食されたのであった。約1ヶ月の日本滞在中は各地で熱烈歓迎を受け、接待攻勢であったが、それでも帰国された時は体重が5ポンド減っていたという。奥様のRitaは元看護師であったから、その原因を「日本食は野菜と魚が中心である」ことに思い至り、以後食生活をすっかり改め、赤身の肉や脂肪の多いものは避け、野菜、魚、鶏肉中心の献立に切り替えた。その翌年、ABAIでお会いした際は、別人のようにお痩せになっており、ご病気ではないかと心配した私は、本人には聞けないのでRitaに尋ねたところ、以上のような答えを得たのであった。

その健啖家ぶりはサラソタでも健在で、1時間半の昼食休憩の時間には、先生は部屋で昼寝



写真2 ラティーノ Paula との接触行動

をされるのだが、その際に「ローストビーフのサンドイッチを買っておくよう」指示され、昼寝が終わり午後のセッションが始まると、発表を聞きながら。「昼寝をするとお腹が空く」とおっしゃりながら完食されるのであった（アメリカのサンドイッチの大きさをや！ しかも寝起きに！）。

また、もうひとつ健在であったのは、女性に対する関心である。国際色豊かなこの会議には中南米出身の参加者が多く、熱烈なハグが行われるが、シドマン先生も熱烈なハグで返される。先生いわく、「ブラジルの女性たちはいつだってこんなふうにハグしてくれる。でも、ナオコは最初のうちはお辞儀しかしてくれなかった。しかし、私は長い年月をかけて、ナオコをシェイピングしたのだ。いまではナオコもハグしてくれようになったのだ！」。シドマン先生が敬愛された Fred Keller の姿が彷彿としたものである（杉山, 1993）。

Donahoe, J. W. and Palmer, D. C. (1994). *Learning and complex behavior*. Boston: Allyn & Bacon.

Sidman, M. (1960). *Tactics of scientific research: Evaluating experimental data in psychology*. New York, NY: Basic Books.

杉山尚子 (1996) ケラー先生逝く！ *J-ABA ニューズ*, Vol.1 No.2, 1-2.

杉山尚子 (2003) 私の好きなこの論文—その11—。 *J-ABA ニューズ*, 30, 7-9.

Sugiyama, N. and Sato, M. (1984). Changes in pigeons' selective stimulus control. *Paper presented at the 11th annual convention of the Association for Behavior Analysis*, Columbus:OH.



写真3 集合写真（日本人杉山との微妙な接触距離）

<自著を語る>

『部下を育てる！強いチームをつくる！

リーダーのための行動分析学入門』

島宗 理（法政大学）

びっくりマークが2つもついた題目に、私も最初は驚きました。出版社からの提案でした。でも、企業人に行動分析学を届けるためには、ビジネス本の編集やマーケティングに長けた出版社と編集者の意見を尊重すべきであると考えました。正直、半信半疑でしたが、おかげさまで、今のところ、売れ行きは好調のようです。

本書は、副題にもあるように、部下を育て、強いチームをつくる方法を解説したビジネスパーソン向けの本です。

行動分析学をベースにしたコンサルテーションをグローバル企業に提供している CLG (Continuous Learning Group) の考え方や方法論、大企業への介入事例も掲載しています。CLG は、エネルギー、鉄道、航空、金融、医療・製薬、食品、小売など、幅広い業種の企業に対し、経営戦略を確実に推進し、業績を上げ、成功を持続させるための支援を行っています。

これまで、組織行動マネジメントの考え方を紹介した和書は、弊著『パフォーマンス・マネジメント —問題解決のための行動分析学』(米田出版) も含め、すでに何冊か出版されていますが、コンサルテーションのリアルな事例が読めるのが本書の特徴です。

十年以上前のことですが、CLG が日本の某大手企業にコンサルを提供し、大型 M&A 案件を成功に導いたことがあります(守秘義務により、会社名も含め、これ以上は書けないのが残念です)。

このとき、CLG を起業した当時の CEO の一人、Leslie Wilk Braksik 博士に頼まれて、彼女の著書『Unlock Behavior, Unleash Profits』(McGraw-Hill) の日本語翻訳をお手伝いしました。クライアント企業内の社員研修に使うためでした。

Leslie は Western Michigan University 大学院時代の同級生で、右も左もわからないまま Kalamazoo に着き、アパートが見つかるまで学部生用のドミトリーの部屋で寂しく暮らしていた私を、テニスや食事に誘いだし、友達づくりを後押ししてくれた恩人です。その恩返しにでもなればと思い、お手伝いさせていただきました。

そして2年前、日本と韓国にオフィスを構え、アジアでのビジネスを本格的にスタートさせるので色々お手伝って欲しいという彼女の要請に応えるために、当初は彼女の本の翻訳を出版することを検討しました。ですが、日本の経営者やビジネスパーソンにとって、よりわかりやすく、伝わりやすい本にするためには、日本の文化や慣習も考慮し、日本での事例も加えた方がいいだろうということになり、彼女の本の内容を使う許諾をいただいた上で、オリジナル本として書き下ろしたのが本書です。

「企業は人となり」というのは松下幸之助氏の名言ですが、これを「企業は行動なり」と拡張し、業績につながる行動がよどみなく実行されるように環境を整えることをリーダーの役割であると、本書では宣言しています。

経営者や管理職はもちろんのこと、企業の隅々までこのリーダーシップが発揮されれば、企業は間違いなく強くなります。

本書の第一章では成果につながる行動を見つける方法を解説しています。第二章では行動を変えるための原則を「行動の公式」として解説しています。第三章ではその公式を具体的な事例に適用し、行動の“なぜ？”を推測しながら行動変容を起こす方法を示しています。第四章では企業でリーダーシップを育て、維持する方法を、CLGのコンサルテーション事例と共に紹介しています。そして最後に、第五章ではポジティブな行動マネジメントや行動分析学に対してよくある疑問に対する回答に答えています。

日本企業による海外進出がいよいよ進んでいます。M&Aの数は増加の一途ですし、競争力のある中小企業が国外に打って出ることも増えています。この流れはTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の締結によって、今後も加速していくことが予想されますが、海外進出に伴い、現地社員や顧客とのやりとりで文化の段差にまずく企業もあると聞きます。

国内でも、外国人を雇用したり、女性を登用

したり、異世代の若手に活躍してもらうためには、これまで通りのやり方には限界があると感じている経営者や管理職の方が多いようです。本書は慶應ビジネススクールの講義で参考書として使われていますが、受講生である経営者や管理職の方々からの評判も良いと聞いています。行動分析学には国や文化や世代を超えて適用可能な行動の法則と、国や文化や世代や個人に独特の“個性”や“多様性”に対応できる方法論があります。グローバリゼーションとダイバージョンが鍵になる次世代のマネジメントには、データをもとにローカリゼーションを進めることができる方法論が重宝されることになるでしょう。

本書が少しでもお役に立てれば幸いです。

島宗 理 (2015) 部下を育てる! 強いチームをつくる! — リーダーのための行動分析学入門 — 日本実業出版社 ISBN: 4534053134 1,800円 (税別)

<連載：いま、こんな職場で働いています（1）>

仕事に活かす行動分析学

今関 仁智
(メンタルケア学会)

私は現在、日本学会議・協力学術研究団体である、メンタルケア学会で試験委員・主任研究員・講師を務めております。“メンタルケア”の名が示すとおり、臨床心理学やカウンセリングがメインとなるのですが、私が雇用され

た最大の理由は行動分析学をはじめとする基礎心理学・実験心理学の知識を買われてのことです。“基礎なくして、応用なし”というのは、大学・大学院等のアカデミックな現場では周知の事実ですが、民間の教育団体では、まだまだそ

の認識は薄く、教育カリキュラムが基礎的背景を持たない状態で構築されている現状があります。その中で、心理学の基礎知識の重要性を理解し、カリキュラムの拡充を図ることを目的として、私が雇用されたという次第です。

私がメンタルケア学会に勤務し始めて 2 年ほどになりますが、その間に、毎年 1 回開催している学会大会で登壇していただく先生方のオーガナイズや新規学会研修の企画・立案、また、本年度からは奈良県立医科大学と複数の企業との共同研究を開始し、まだまだ若輩者の私が一部の研究については責任者を務めさせていただいております。研究においても、やはり学部と大学院でゼミに所属した 4 年間に勉強した行動分析学の知識が非常に重要であると強く感じております。研究計画における条件統制において、行動分析学の持つ厳密さが、共同研究者である医学博士の先生や企業の部長クラスの方々にとって納得のいくものとなっていると、私は考えております。また、共同研究という形式の中で、他領域である医学との連携や企業側のビジネススキームとのバランスにおいて、行動分析学の対象や状況を限定しない汎用性が現場での私の常なる支えとなっています。

また、今年には心理職の国家資格化に関する法案や、企業における従業員のストレスチェック義務化に関する法案など、心理学領域とも関係

の深い法制度・政策に動きがあったこともあり、国会議員や議員秘書官、官僚の方々とお話をする機会がありました。個人的な感想ではありますが、議員や秘書官、官僚の方を目の前にして話をしている時、私は指導教官に自分の研究について報告している時と重なるものを感じました。それは、今の自分は科学的・論理的な観点から意見を述べることを求められているということです。至極、当たり前の話のように思われるかもしれませんが、社会人として曲がりなりにも、様々な方々と専門的なコミュニケーションができているのも、行動分析学の持つ科学的かつ論理的な思考というエッセンスが自分なりに活かしているからなのではないかと思っております。

今回、ニューズレターの執筆にあたり、最近の自分の活動を振り返って見ますと、大学・大学院の時に得た財産で全てが成り立っているように感じます。私が日本行動分析学会に初めて参加させていただいたのは 2005 年の第 23 回年次大会（常盤大学）の時、学部生で右も左も分からない状態で、先生方や先輩方のポスター発表をただぼうっと眺めているだけでしたが、その頃からの連綿と続く“行動分析学的な経験・体験”が 10 年経過して 30 代になってしまった今の私に、ただ眺めている以上のことをさせてくれているのではないかと感じております。

編集後記

新体制になり、2号目の発刊となりました。突然の原稿依頼にもかかわらず快く寄稿をしていただきました諸先生方、誠にありがとうございました。今号は従来の連載記事や、年次大会の案内を中心に記事を掲載させていただきました。また、今号よりひっそりとではありますが、「こんな職場で働いていいいます」という新たなジャンルの記事も掲載させていただきました。次号以降も編集委員一同が考えた新企画の記事を掲載させていただく予定であります。ぜひ来

年もニューズレターを楽しみのひとつにしていただければと思います。また、会員の皆様からの企画も受け付けております。こんな記事があったら面白いのではないかというアイデアがありましたらぜひニューズレター編集部にお知らせください。それでは寒さも厳しくなってきましたが、お体に気をつけ良いお年をお迎えください (NK)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱いに、十分ご注意ください。

〒369-0003 埼玉県所沢市中富南 4-25

日本大学大学院総合社会情報研究科

日本行動分析学会ニューズレター編集部

眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp